

「四天王と仏教」

医療法人社団 篠路整形外科
池本 吉一



西方を守護する四天王の広目天



北極星と広目天

270年ぶりに中国に統一的な中央集権国家として君臨した隋王朝は、598年以降、4度に渡って高句麗を攻め、朝鮮半島3国（高句麗・百済・新羅）や古墳時代であった日本に大きな危機感を与えていた。そんな折に、日本は崇峻天皇の時代であったが、政権内部では、いち早く中国に先に仏教ごと先進国から入っていた制度や文化を取り入れ並ぼうと考えていた、当時の日本の政権を握っていた革新的な蘇我氏が、廃仏をとんでいた守旧派の物部氏を滅ぼした。この戦いの渦中において、次世代を担う推古天皇の甥の厩戸王（後の聖徳太子）にまつわる伝説がある。太子は、蘇我軍のしんがりに従事していたとされていたが、このままでは敗北するとみて、副官の秦造河勝に白膠の木を用意させ、その木で四天王の像を刻ませ、「いま我をして敵に勝たしめたまわば、必ず護世の四天王のおんために寺塔を起立せん」と誓い、その太子が舎人の迹見赤檮に命じて、四天王の矢を射させると、大木に登っていた物部大連は胸を射抜かれ、転げ落ちたそう。その誓いが大願成就され、難波に四天王寺（荒陵寺）を建立したといわれる。

仏教における須弥山（しゅみせん）という山は、古代インドの世界観の中で中心にそびえているといわれる山のことで、5層の構造となっている。下からの三段には夜叉神、四段目に四天王がおり、頂上には梵天・帝釈天をはじめとする三十三天がいて、天空にいる仏たちを下界の悪魔たちより防衛していると考えられている。この山の周囲は海に囲まれているが、その東方の島を東勝身洲、南の島を南瞻部洲、ここに私たち人間や動物が住んでいるが、西を西牛貨洲、北を北俱盧洲なる四つの大きな島があり、その島々を四天王は防衛していて、持国天は東方を、増長天は南方を、広目天は西方を、多聞天が北方を担当していると。その後、天平時代に入り、東大寺戒壇院に安置されている四天王の仏像造立が仏教思想による、鎮護国家建設の意図のもとによる国家的事業とみなされ、諸国に伽藍を誇った国分寺が建立されるようになっていった。

さて、数多くの日本人は、自分の最後を仏教式の葬式により「あの世」に旅立って行くにもかかわらず、仏教について、つまり釈迦牟尼の教えについて理解している人は皆無と言って良いだろう。我々日本人が普段の日常会話のなかに「有頂天」、「現在」、「過去」、「未来」、「有難い」、「畜生」、「釈迦に説法」、「就職活動に四苦八苦」、「縁起が悪い」など、何気に使っている言葉がすべて仏教に由来する言葉であることを気が付かず使用している人の実に多いことか。すべての日本人の遺伝子に深く刻み込まれているこの仏教について知ることは、日本人そのものを知るのに大いに役立つはずである。我々の死生観、生きがい、価値観、人生観、道徳、倫理観すべての哲学の原点をなすものと考えられたからだ。

ところで、『あなたの家の宗派は何教ですか?』と尋ねると、「浄土宗」、「浄土真宗」、「日蓮宗」、「臨済宗」などと考える人が多いが、これらはすべて、聖徳太子によって初めて日本国内に仏教が取り入れられて、鎌倉時代に入って、元々、天皇、貴族のための宗教だったものが、武士などのために新仏教として改変したものであり、教義に少し改良が加えられたものである。さらには、その日本に入ってきた仏教も唐王朝の中国に入ってきた大乘仏教。その代表といえるのが、606年に主に北インドで興ったヴァルダナ朝の時代に、唐からインド

に旅した玄奘という僧侶がハルシャ王の厚い保護を受けながら、インドのナーランダ一僧院にて仏教を学び、帰国して多くの経典を漢文に訳すとともに、後の明代の小説「西遊記」の素材となる旅行記「大唐西域記」を著した。これにより、当時の中国社会に浄土教の教えが社会に広がる一方で、中国的仏教と言われた禅宗が、最澄や空海によって日本に伝えられた。それら、天台・真言の両宗ともに密教として受け入れられ、国家、社会の安泰を祈って災いを避け幸福を追求しようとする加持祈禱を行い、日本独自の仏教として広く天皇や貴族たちから崇められることに繋がり、天皇家独自に崇めていた神道とも、その精神が良くなじんで、8世紀ごろからは在来の神々への信仰と融合する動きも現れ、神仏習合という大きな動きへと発展した。

その時代より遡ること 1300 年前に仏陀は生まれ、29 歳の時にヒマラヤ山麓に興っていたシャーキヤ族の王国第一王子は妻子を捨て出家し、6 年間隣国のマガダ国にて修行に励んだ。その結果、人生を生きることを「苦」とみて、その苦から脱する道を求めた結果、苦の原因は諸行無常という真理に人は気付かず、無常である存在に固執することにあると悟った。その苦より脱するためには、人の内にある煩悩をなくし、解脱・涅槃の境地に至らなければならない。そのためには出家し、托鉢をして廻りながら、正しい方法（八正道）で修行する必要がある。その修業はジャイナ教の苦行主義とは異なり、苦行と快樂の両極端を排した中道に立つことであると。現在の日本の仏教とは程遠い、言うなれば自己啓発に近い、釈迦がとなえている哲学のような教えであった。しかも、当時、仏教が成立した時代には、カーストの原型を成すバラモン教なる古代インド的哲学がすでに存在していて、人は死後に別の生を受ける過程を繰り返す「輪廻転生」が広く信じられていたため、生前の人が織りなす歴史や伝記を文字にして残すことは無意味な事とみなされた。仏陀がその 80 年の生涯を閉じた後、仏陀の生涯の侍者であったアーナンダを中心に多くの弟子たちが集まり、仏陀の教えを後世に伝えるための第 1 回目の仏典結集、続いてその 100 年後の第 2 回目の仏典結集が開かれた際ですら、口頭伝承されたに過ぎず、その後、紀元後 1 世紀に入り、イラン系のクシャーン人がインダス川流域に進出し、クシャーナ王朝が建国されると、130 年頃カニシカ王の時代になり、都をガンダーラ地方のプルシャプラに遷都した。その都は中央アジアからガンジス川中流域に至る地域で、シルクロードの要所であったことから、古代ローマとの交易が盛んとなり、仏教も手厚く保護され、仏塔も国内外に建立され、第 4 回仏典結集がなされる頃より、ようやくサンスクリット語にて仏典が記載され始めた。また、この頃より、仏教の中にも新しい運動が起き、出家者のみが厳しい修行を行って、自身の救済を求める求道的な考え方に変化が生じ、自身の悟りよりも人々の救済がより重要と考え、出家しないで在家のまま修行を行う、菩薩信仰が広まった。それまで仏陀は畏れ多いものとされ、その姿の具体的な像が作られてこなかったのが、このヘレニズム文化の影響により仏像が生み出されることに繋がるのである。この新しい大乘仏教は、ガンダーラを中心とした仏教美術とともに、中央アジアから中国、日本に伝えられる事になったのである。

(令和 2 年 元旦 記)

【参考文献】

- 1) 寺島昇ほか『新版世界各国史 7 南アジア史』山川出版社, 2004
- 2) 木村靖二ほか『詳説 世界史研究』山川出版社, 2017
- 3) 佐藤信ほか『詳説 日本史研究』山川出版社, 2017
- 4) 藤巻一保ほか『神仏のかたち② 四天王』学習研究社, 2004
- 5) 山本敦編『魅惑の仏像 四天王』毎日新聞社, 2000
- 6) 馬場紀寿『初期仏教 ブッダの思想をたどる』岩波書店, 2018
- 7) 西山厚『仏教発見!』講談社, 2004
- 8) 瓜生中『釈迦の生涯と日本の仏教』青春出版社, 2019
- 9) 松尾剛次『仏教入門』岩波書店, 1999
- 10) 島田裕巳『教養として学んでおきたい仏教』マイナビ出版, 2019
- 11) 山折哲雄『仏教とは何か』中央公論新社, 1993
- 12) ジャン・ボワスリエ著, 富樫瓊子訳『ブッダの生涯』創元社, 1995
- 13) 佐々木閑ほか『ごまかさない仏教』新潮社, 2017
- 14) 沖田瑞穂『マハーバーラタ入門』勉誠出版, 2019
- 15) 山崎元一『世界の歴史 3 古代インドの文明と社会』中央公論新社, 2009